



日本SPF豚協会だより

2024. 7
No.96

提 言

ホクレンSPF豚ピラミッドの 取組みについて

日本SPF豚協会理事 ホクレン畜産生産部生産技術課課長

金内一浩



ホクレンSPF豚ピラミッドはホクレン滝川スワイン・ステーションが平成5年4月1日に日本SPF豚協会からGGP及びGP農場の認定を受けた際に設立し、今年で31年目を迎えました。現在ホクレンSPF豚ピラミッドの会員農場は9農場あり、会員農場の飼養規模は合計約4,400頭となっております。

ホクレンSPF豚ピラミッドでは会員農場の衛生レベルの維持向上に努めていただくため、また安全安心でおいしい豚肉を安定的に食卓に届けるため「ホクレンSPF豚ポリシー」を制定しており、ポリシーの遵守によって会員農場の更なる発展と道産SPF豚の品質の向上に努めることとしています。

「ホクレンSPF豚ポリシー」は、以下のとおりです。

1. ホクレンSPF豚ピラミッドを構成する農場とホクレンは、**互いの発展と繁栄のため相互の事業目的を尊重し協調と互助の精神を以って強い協力関係を形成する。**
2. 「道産SPF豚生産農場」とホクレンは、**揺るぎのないSPF精神を以って、「道産SPF豚」の品質の向上と生産信頼性に共に責任を有し、相互協調によって、銘柄性の強化と更なる発展を目指す。**

ホクレンSPF豚ポリシーとSPF理念の遵守による良好な衛生レベルの維持向上によって会員農場の皆様は、全国的に高水準な生産成績を維持し続けられていると考えています。その一助となるべく、弊社としては地元JAや系統関連会社、団体と連携して会員農場の要望に応じた生産成績検討会の定期開催や全農クリニック検査など、生産性向上に向けたフォロー体制を構築しています。第三者の目として農場内飼養環境や豚の様子、生産成績を併せて確認すること

により、生産成績の更なる向上を図ることを目指しています。

また、生産性を著しく低下させてしまう疾病は、意図せず一気に農場に蔓延してしまう危険性があります。洗浄消毒や十分な乾燥など、「基本に忠実」をモットーに衛生レベルを維持することが道産SPF豚の基礎となっていることを改めて消費者に訴え続けていきたいと考えております。

現在、円安の影響や飼料原料価格の高騰による配合飼料価格をはじめとした資材価格が高止まりしています。豚枝肉価格も通年で見れば不安定な相場となっており、かつ販売物への価格転嫁が順調に進んではいない状況下では安心した経営を営みにくい情勢です。そのような時勢こそ、「基本に忠実」なSPFの優位性が出ると考えています。

その中で、疾病を抑えるためのワクチンや抗生物質など薬剤の使用は全て、お金と労力がかかることであり、全く使わないことが一番の理想です。そして、特定疾病の排除で成長阻害要因を排除して飼料要求率を高め、事故率を低減させること、高水準な生産成績を更に向上させることが、足腰の強い経営につながることは皆が理解しているところですが、改めて啓発していくことがあらゆる疾病リスクの低減然り、安定経営に寄与できると考えています。今後も弊会の取組を通じて会員農場との信頼関係を深め、厳しい情勢下でも安定した経営基盤を構築できるよう邁進してまいります。

最後に、消費者の皆様においしく安全安心の豚肉を安定的に提供できるように「ホクレンSPF豚ポリシー」を柱として、今後も会員農場と相互協力してまいります。そして、道産SPF豚がさらに発展できるよう、ホクレンとしての役割を全うしていきます。

創立55年・法人化20年・認定制度30年の節目 定時総会を開催し 全議案を承認

本年度の定時総会（第20期代議員会）は6月17日（月）、東京都千代田区のKKRホテル東京において開催いたしました。今年もリモート併催としました。新体制でスタートした昨年度の事業経過・決算報告、今年度事業計画案および予算案など、全議案についてご承認いただきました。会員の皆様には議案および議事録をお送りしております。事業経過報告および事業計画案等の概略を掲載します。



●令和5年度事業経過報告

令和5年度の認定農場数は173農場（GGP・GP17農場、CM156農場）、飼養母豚数は72,671頭となり、農場数、飼養頭数とも前年度より減少しましたが、全国の飼養母豚数に占める認定SPF豚の割合は9.4%（前年度9.5%）と、ほぼ横ばいとなりました。

生産成績を前年度と比較すると、一貫生産農場では1母豚あたりの年間出荷肉豚数は昨年より約0.3頭増加しましたが、農場飼料要求率は横ばい、農場回転数と出荷肉豚1頭あたりの抗菌性薬剤（A薬品）費は悪化しました。このため総合生産指数は横這いにとどまりました。繁殖専門農場（繁殖-II）でも、総合生産指数は横這いでした。肥育専門農場（肥育-II）では、認定に関わる3項目とも前年度を下回り総合生産指数が低下しました。

社会生活も少しずつコロナ禍前に戻りつつある中、感染対策等にも引き続き気を配りながら事業を進めました。

SPF豚セミナーは、オンライン併用のハイブリッド方式で開催いたしました。生産成績最優秀農場の事例発表、薬剤耐性対策・アニマルウェルフェア指針の解説、現場で役立つ農場のバイオセキュリティの取り組み等、多岐にわたる講演が講評を博し、充実した内容となりました。4年半ぶりに

懇親会も復活、参加者の貴重な情報交換の場となりました。

今年度事業の大きな柱の一つとしていた次世代育成については、SPF養豚や協会事業に対する理解を深め交流する場として、交流会・意見交換会を開催いたしました。ピラミッドおよび関係組織の若手が協会事務所に集まり、協会認定業務や疾病の基礎知識、農場を取り巻く様々な問題などについて講義を受けました。普段なかなか機会のない、同世代の意見交換や交流も図られました。

理事会、定時総会、認定委員会、ピラミッド会議等、すべてオンライン参加併用で開催いたしました。

認定委員会は前年度に引き続き、ピラミッドの協力のもと事前審査を実施、会議の合理化・効率化を図りました。

協会だよりは4回発行、会員への情報提供、国の施策等についての注意喚起、またイベント紹介等に活用しました。協会ホームページではセミナーの模様を動画にて公開しました。また、協会50年史や協会だよりのバックナンバーについては引き続き閲覧できるよう更新しました。

ポーククリーフレットを増刷（一部改訂）し、会員やSPFポーク取り扱い関係者に積極的に活用してもらうよう働きかけました。認定マークデザイン使用の推奨、無菌豚等の誤認表示や提示に対する抗議申し入れ等も随時実施しました。

協会の将来像、認定制度のあり方については引き続き検討を続けることとしました。

認定業務を中心とした事務作業のDX化については、ピラミッドの専門家の協力を得ながら、担当業者とシステム構築を進め、クラウドサービス上での操作環境の確認等行いました。次年度早々には実用化できるよう精査中です。また、データベース化に先立ち、認定資料をデータでの提出に切替え、チェックの簡便化、紙媒体資料の軽減、ペーパーレス化につなげました。また、引き続き電子帳簿法に基づく請求書等経理書類のペーパーレス化に取り組みました。固定費低減・事務局のスリム化については、ホームページ管理会社を変更、セキュリティを強化したうえで管理費を低減したほか、引き続き情報収集いたしました。

日本SPF豚研究会・日本養豚学会・豚病研究会・HAC CP関連会議等、セミナーや学術会議への出席、家畜衛生主任者会等農林省主催会議の傍聴など積極的に行いました。農林水産省関係部署からの情報提供については、ホームページや協会だよりを活用、またピラミッドを通じて周知しました。

●令和6年度事業計画

2024（令和6）年は協会創立55周年、法人化20周年、認定制度開始30周年という節目の年となります。半世紀を経た5年前から協会のあり方、将来像、さまざまな課題について検討を続けてきましたが、記念事業も視野に入れながら、次の50年に向けてのさらなる事業発展と充実をめざします。

◎主要行事の開催

会員、ピラミッドの協力を得ながら、総会、理事会、認定委員会、ピラミッド会議、SPF豚セミナー等の開催を通して協会事業の推進を図ります。

◎ピラミッドおよび会員農場の次世代交流会等の実施

引き続き、次代を担う若手がSPF養豚や協会事業に対する理解を深め、交流できる場を設けます。会員農場の後継者世代にもその対象を広げます。意見交換を通して、若い世代の考え方を事業推進に活かせるようにします。

◎認定成績集計データの活用、表彰制度の継続

CM農場の生産成績のフィードバック（ベンチマーキング）

グ）、現行の集計方法では根拠とするデータにタイムラグが生じることから、認定時の直近データをもとにした集計方法を検討し、より役立つ情報として農場に還元します。成績優秀農場へのAマーク貼付についても基準を見直します。また、蓄積された貴重な農場生産成績をもとに、大学の研究者など専門家に分析を依頼できないか、活用方法を探ります。成績優秀農場の表彰は継続し、現行以外の表彰部門や選考基準の見直しも引き続き検討していきます。

◎認定業務のDX化

クラウドサービスを活用した認定資料のデータベース化を速やかに実用化します。

◎協会だよりの発行、協会ホームページの活用

年4回発行の協会だよりやホームページを活用し、疾病問題、ワンヘルス、AW等々、業界を取り巻く様々な課題に対して情報提供していきます。また、会員同士の交流の場として活用するほか、SPFポークへの正しい理解、認知度アップにも取り組みます。

◎協会の将来像、認定制度のあり方についての検討

これからの協会のあり方、ヘルスチェック検査の課題等について、ピラミッド、日本SPF豚研究会の協力を仰ぎながら、引き続き協議していきます。

◎事務局の業務合理化

事務・保管資料のペーパーレス化をはじめ引き続き取り組むとともに情報収集に努めます。

◎協会代議員制度について

協会の総会は、定款第17条に基づき正会員の中から選出された30名以内の代議員で構成されております。世代交代や退会による欠員、後任選びの困難さなど、課題も出てきております。来年度までに、総会のあり方や代議員制度の見直し、定款変更などについて検討いたします。

●代議員及び理事の交代

組織内人事異動に伴い、中国四国選出代議員で理事の小椋和典氏（鳥取県、(株)西日本ジェイエイ畜産）から宇留野勝好氏（同）に、シムコピラミッドの代議員および理事が増穂賢志氏から渡辺秀樹氏に、それぞれ交代いたしました。渡辺理事は増穂氏の後任として副会長に就任いたしました。

第18回

農場バイオセキュリティ
強化のための
最新情報


去勢豚の 事故が多い要因

アニマル・バイオセキュリティ・
コンサルティング(株)

三宅眞佐男

去勢子豚(ヌキ)の事故が多いことは多くの農場で経験されていると思います。図1は総生存産子数9千頭/年(白豚)の農場で週齢別、雌(♀)、雄(♂)、ヌキ別の事故率です。本稿で事故は死亡+淘汰とします。ヌキが生後1週齢で特に多く、31日齢以上でも同様です。一方、同年の母豚計約5千頭の農場のF1+三元豚(♀とヌキ)の30日齢以前の事故は♀8.5%、ヌキ12.0%でした。何れもヌキで事故が多い主な原因として生後間もなく実施する去勢作業が考えられます。不潔な道具や手指による切開と睪丸を掴んで精索を引きちぎる作業及び切創が癒合する迄の間、ふん便による汚染が影響しているでしょう。特に、精索付着部の損傷と切創からの腹腔内感染が事故につながると考えます。図2は哺乳中に圧死した未去勢♂の正常な精索と不着部付近ですが、同じくヌキでは出血があります(図3)。図4は哺乳後期に死亡したヒネ子豚の腹腔内ですが、リンパ節の腫れと変性が顕著です。この死因は特定していませんが周辺の感染と日数経過がうかがえます。更に、出荷豚の内臓廃棄への影響も推察できます。図5は同じ農場の月別、性別出荷割合ですが、8~9月にヌキの出荷が少ないにもかかわらず、大腸と小腸の廃棄率はこの2ヵ月多く目立ちます(図6)。廃棄個体の性別は不明ですが、事故に至らなかったヌキの状況を反映しているかも知れません。新生豚は痛み鈍感と言う人もいますが、ある報告¹⁾では去勢子豚の苦痛や不快行動は術後5日目迄みられるとされるので影響は小さくないでしょう。

(次号に続く)

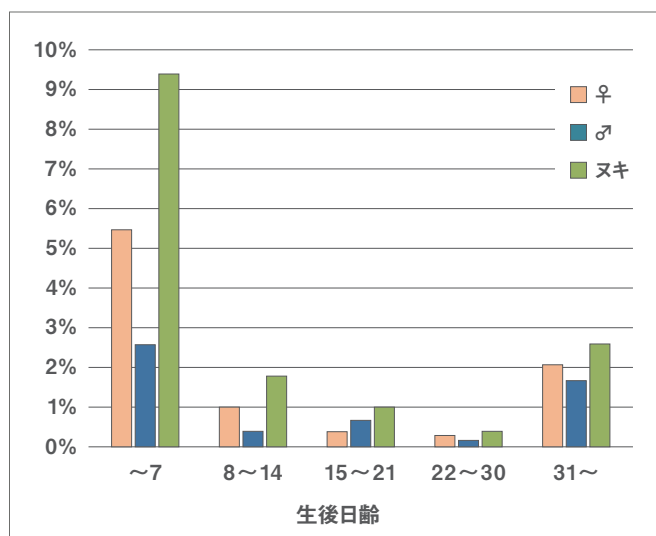


図1 日齢別死亡+淘汰率



図2 圧死未去勢豚の腹腔内



図3 圧死去勢豚の腹腔内



図4 死亡去勢豚の腹腔内

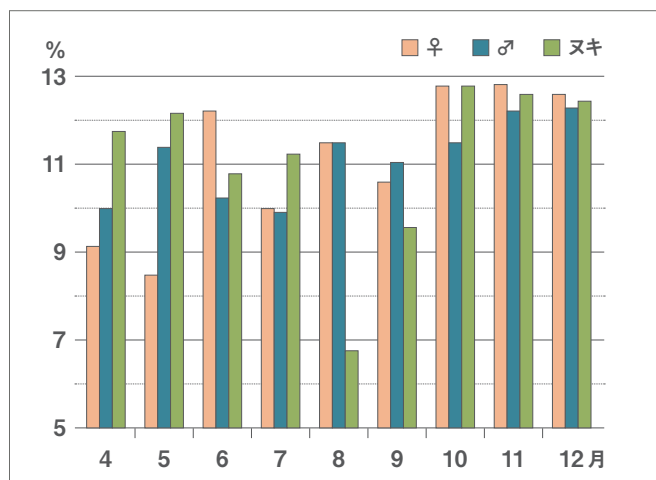


図5 性別月別出荷割合

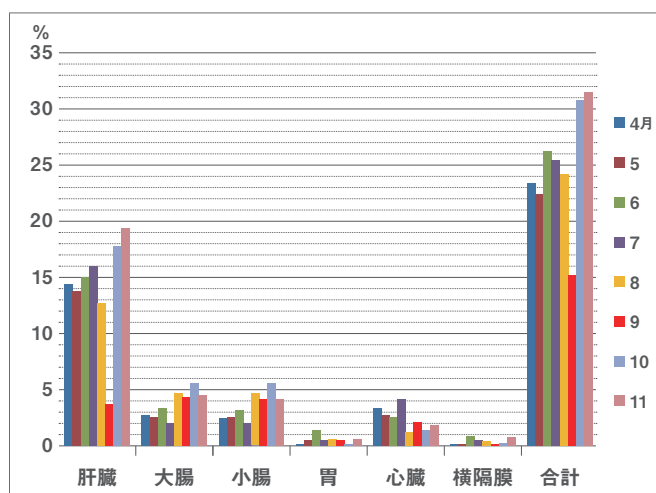


図6 月別内臓廃棄率

¹⁾ 藤原昇 外科的去勢の去就 養豚の友2012-4月号

TOPICS

国際養鶏養豚総合展 (IPPS) 2024 協会ピラミッドや賛助会員が多数出展

4月24日～26日の3日間、愛知県・ポートメッセ名古屋において「国際養鶏養豚総合展 (IPPS) 2024」(国際養鶏養豚総合展運営協議会主催) が2年ぶりに開催されました。展示会場は駅直結の1号館に集約され利便性も向上、3日間のべ来場者は2万3,000人超で、過去最高となった2022年を上回りました。

協会関係者ではシムコピラミッドと全農グループおよび多くの賛助会員が出展されており、来場者の高い関心を集めていました。



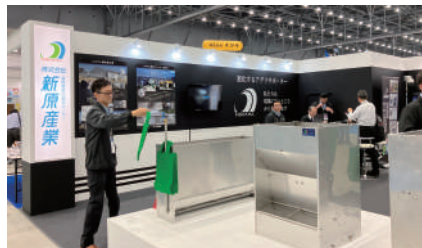
シムコピラミッド



日清丸紅飼料(株)



フジ化成(株)



(株)新原産業



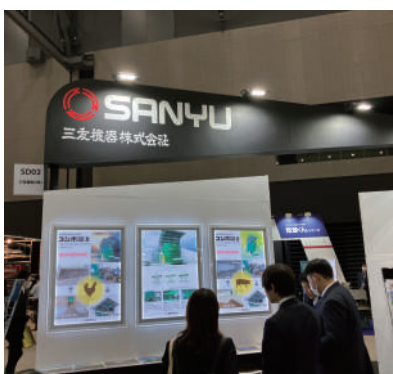
(株)フロンティアインターナショナル



JA 全農グループ



(株)中嶋製作所



三友機器(株)



東亜薬品工業(株)



(株)ダイヤ



(株)シムコが行ったプレゼンテーション

北島前会長が 日本養豚学会養豚功労賞を受賞

前号でもお伝えしましたが、北島克好前会長（現顧問および監事）が第18回日本養豚学会養豚功労賞を受賞されました。

功績は「養豚生産基盤強化とSPF養豚システムの普及促進に関する貢献」です。協会関係者では赤池洋二元会長（現名誉会長、第2回）、故柏崎守前認定委員長（第5回）に次ぐ3人目の受賞となりました。

3月14日、東京農業大学厚木キャンパスにおいて授賞式が執り行われ、賞状と記念品が美川智日本養豚学会会長より授与されました。

北島顧問は受賞の挨拶で「47年前、全農に入会し研究所に配属され、SPF豚作出に取り組んで以来、ずっと豚一筋でした。この間、次の世代にバトンを渡せるような仕事をしたいと思って取り組んできたつもりですが、道半ばという気がします。このような名誉ある賞をいただき大変光栄です」と述べられました。

北島顧問は宮崎大学獣医学科卒業後全農に入会、研究所や支所勤務ののち関連会社社長を歴任し、さまざまな立場でSPF豚を始めとする養豚事業発展に貢献されました。

2008年、協会生産ピラミッドである全農畜産サービス社長に就任、重責を担いつつ2011年には赤池会長の後を受けて協会会長となり、6期12年間、SPF豚事業推進のため多大なる尽力をされました。2015年からは養豚学会の役員を歴任、現在も監事を務められています。

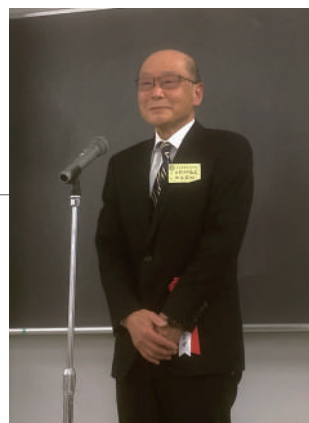
茨城県石岡市から長距離通勤し、組織のトップを兼任しながら学会役員も務める一方で、2015年からは茨城大学

大学院に入学、東京農工大学を経て、今年3月博士号を取得されました。その勤勉さ、探求心、行動力にはただただ敬服するばかりです。

研究テーマは残念ながら豚ではなく（笑）、「産卵鶏の鰹後腺の形態学的研究」という何やらとても難しそうなものです。若かりし頃、恩師の研究に興味を覚えたことが30年の時を経てよみがえり、研究の動機になったとのこと。

6月6日、協会事務所において開催された認定委員会終了後に、認定委員および傍聴希望者を前に北島顧問による記念講演が行われ、ご自身の歩まれた道と研究テーマについてお話しいただきました。専門性が高く難解ですが、学会誌等にも掲載されています。

この度の二重の名誉に心よりお祝い申し上げます。



受賞の挨拶を述べる北島顧問



丹羽賞（学術賞）・奨励賞受賞者と共に記念撮影する北島顧問（左端）

協会からのお知らせ

●認定委員の交代

学識経験者委員に一般社団法人日本養豚協会の海老原達之氏が就任いたしました。

また、ホクレンピラミッドの斎野仁委員に代わり奥村利盛氏が、日本農産工業ピラミッドの櫻井忠委員に代わり小柳理恵子氏がそれぞれ就任しました。櫻井委員には学識経験者委員に就任いただきました。



協会事務所（リモート併催）で記念講演する北島顧問（左端）

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPF豚ばら肉の コンフィ

●レシピ提供・ESOLA 新宿店（東京都新宿区）

竹内 克将

コンフィとは？低温の油でじっくり食材を煮るフランス料理のことだそうです。材料も味付けもシンプル、その分素材のよさが引き立ちますね。時間をかければ家でも本格的な味を楽しめそうです。ぜひSPFポークでお試ください。

● 材料 ● (2人前)

SPF ポークばらブロック肉 400 ～ 500g

塩 5g (肉の重量に対して1%)

おろしにんにく 5g (肉の重量に対して1%)

胡椒 適量

サラダ油

付け合わせの野菜 お好みで

● つくり方 ●

- ① 豚肉の水気を拭き取り、フォークなどで全体的に穴をあけます。
- ② 塩、おろしにんにく、胡椒をゴシゴシとすり込み 15 分以上置きます。
- ③ ①を半分に切り、小さめの鍋に入れてサラダ油をヒタヒタになるまで加えます。
- ④ 強火で加熱しふつふつしたら、極弱火にして1時間煮込みます。途中2～3回上下を返します。
- ⑤ 豚肉を取り出しフライパンで全面に焼き色をつけます。
- ⑥ 食べやすい大きさにカットして付け合わせの野菜と一緒に皿に盛りつけます。

★竹内シェフからのアドバイス

ローズマリーなど入れてより本格的に仕上げるのもオススメです。

認定情報

●2024年6月認定農場

(有効期間：2024年6月6日から2025年6月末日まで)

北海道・鈴木ビビッドファーム、青木ピッグファーム(株)、(有)フロイデ農場、岩手県・全農畜産サービス(株)東日本原種豚場、(株)のだファーム第一農場、同第一肥育農場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、(有)篠崎畜産、常陽醗酵農法牧場、群馬県・J A 全農くみあい飼料(株)利根スワイセンセンター、利根沼田ドリームファーム(株)、(株)畜産経営研究所前橋農場、千葉県・(株)ユウアイ、同森戸農場、高橋幸雄養豚場繁殖農場、同肥育農場、(有)ピギー・ジョイ第1農場、木内養豚第1農場、同第2農場、岡山県・岡山 J A 畜産(株)荒戸山農

※次回認定委員会は9月12日(木)の予定

場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、愛媛県・富永養豚、J A 全農くみあい飼料(株)愛媛養豚実証農場伊予スワインガーデン、酒井ピッグファーム繁殖農場、同肥育農場、(株)多田ファーム、(株)多田ファーム天貢農場、佐賀県・J A さが天山ファーム、長崎県・(株)伊藤ファーム繁殖農場、同肥育農場、(株)濱田ファーム、J A 全農長崎県本部五島種豚供給センター、宮崎県・(有)レクスト繁殖農場、同肥育農場、ジャパンミート(株)川南農場、ジャパンミート(株)御池農場、クリーンファーム(株)、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場、(株)かいたく大口農場 (以上42農場)



有限会社 レクスト
長友浩人さん
(宮崎県えびの市)

自分で作った豚肉のファンになる 「まるごとえびの」で 子どもたちにおいしい豚肉を



長友浩人社長と経理課長の
長久津みゆきさん



鹿児島県と宮崎県の境に連なる霧島連山、えびの市はその美しい山並みの麓にあります。

長友浩人さん(52歳)はえびの市の標高730mの地で母豚1,300頭のSPF豚一貫生産農場を経営している、宮崎県を代表する生産者のお一人、宮崎県養豚生産者協議会の会長、日本養豚協会の理事もお務めです。

浩人さんのお父さんである長友俊二さんが養豚一代目、自宅のあった児湯郡木城町で300頭一貫農場からスタート、1994年に今の農場を立ち上げ、2002年に認定農場となりました。

子どもの頃から農場の手伝いもしていたという長男の浩人さん。ご本人曰く「素直でまじめな性分」で、当たり前のように学業を終えるとすぐに静岡の養豚場に研修へ。多少の紆余曲折はあったようですが(?!)、養豚を一から学んだ後宮崎に戻り、専務として俊二社長を支え、1994年レクストを立ち上げました。「豚は他の畜種に比べて独特ですね。いろんな段階があって面白い」。ちなみに弟さんの克浩さんも木城町で繁殖専門のSPF豚認定農場「(有)ナガトモ」を営んでいます。

浩人さんは有名デパートでの直売、食肉加工販売事業を開始するなど販売にも力を入れてきました。2009年、協会が神奈川県川崎市で開催される「ちくさんフードフェア」に初めて出店した時も、試食用の自農場産の豚炭火焼を用意、自來来場者にすすめイベント慣れない協会スタッフの先頭に立っていただきました。「生産者には出荷して終わり、という人もいると思いますが、自分で作った肉の値段は自分で決めるというのが大事だと思います」と浩人さん。

2012年に社長に就任、今力を入れているのが地元えびの産の飼料米や芋焼酎かすを飼料にした銘柄豚「いもこ豚」事業です。えびの市は宮崎の米どころ、焼酎どころでもあり、米農家、芋農家、焼酎メーカー、行政などが一体となって「えびのエコフィード利用・推進協議会」を設立し、ブランド展開しています。コンセプトは「まるごとえびの」。

大事なことは、「作っている自分たちがファンになること」。農場従業員に自農場産の豚肉を食べてもらいおいしさを実感してもらう。小中学校の給食に「いもこ豚」を提供、子どもたちにおいしさを知ってもらう。子どもたちを通じて大人にもファンを広げる。評判があがって生産者のモチベーションもあがる—そんな好循環を描いています。

宮崎県のふるさと納税の返礼品としても人気が高い「いもこ豚」。販売拡大に対応するための別会社を設立し、いもこ豚の直売所のある食肉加工工場も新設しました。

総勢30名を率いる社長で多くの要職を抱え大忙しの浩人さん、28歳で結婚した晃代さんとの間に二男三女、24歳から15歳の5人のお子さんがいるお父さんでもあります。かつて今も、忙しい合間を縫ってそれぞれの部活の応援に。「子どもたちが学んでいる姿を見て親の方が教わることが多いですね」。

毎日ウォーキングして「いもこ豚の飼料のために(笑)」えびの産焼酎を飲むのが趣味という浩人さん。大らかでアイデアにあふれ、人を引き付ける魅力のある「素直でまじめ」な社長に聞いた協会に望むことは? 「国内のSPF豚生産者が同じ価値観、こだわりで集まっている協会だからこそできることがあるのではないのでしょうか。今がそのチャンスかも」と言っていました。(編集部)

編集後記

全国的に梅雨入りが遅れましたが、遅くなればその分を取り戻すように大雨が降ると言われています。以前、那須で線状降水帯が発生し、激甚災害指定を受けたことがありました。高圧鉄塔がバタバタと倒れオモチャのように車や家が転がり、ゴジラ映画のようでした。水の怖さを思い知らされましたが、大災害でなくとも水は普段から高いところから低いところに様々なものを運んできます。農場のフェンスもお構いなしに。今、防疫に無頓着な農場はないでしょう。でも皆さんの防疫対策が理にあってきちんと運用されているか、特に畜舎の出入りなどを別の目で見直してみませんか。(岩魚)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第96号 2024年7月1日発行(季刊)

発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2

TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376

e-mail:j.spf.a@nifty.com

http://www.j-spf.com/

発行人 鷺谷 敏一

編集人 小林 一彦